季報

二松学舎大学附属図書館
Quarterly Report

P2　図書館とレポート　田中正樹

P3　レポート ―書きコトバの難しさをふまえて―　迫田幸栄

P4　理系のレポート文系のレポート、そして数学のレポート　今井悠人

P5　「レポート作成」という行為を振り返って　菊地宏樹

P6　ブックマークを使ってみよう！

P7　本学所蔵資料紹介　／　作家のおやつ巡り①

P8　本学教職員著書紹介

No.110

2021（令和３）年７月

図書館とレポート

文学部中国文学科　教授　田中　正樹

私にとって心地よく秘密めいた場所とは、常に図書室（乃至図書館）及び古書店であった（別に死体や秘密の扉がなくても！）。小学生の頃は聊か暗めの、中学生の時は明るく新しい図書室が気に入っていたし、高校生になると古くかび臭い図書室は、特に借りるべき本がなくてもよく足を踏み入れる落ち着いた空間であり、北浦和にある市立図書館では帰宅部の同級生とよく顔を合わせたものである。また、神保町に来るようになったのは中学生の頃だが、当時はまだ三省堂が近代的建築になる前、趣のある古風な佇まいの洋館で、薄暗い店内はどことなく学問の香りが漂っているように感じられた。古書店も現在より老舗が多く軒を連ねていて、若輩の身にとっては少し敷居が高く感じられる場合もあったが、一方冒険に近い高揚感もあり、書籍に溢れた理想の街の散策を楽しんだものである。結局、少年期から現在に至るまで私の行動様式はほとんど一律であり、つまり今の私は「書癖」が嵩じたなれの果てということになろうか。

かように、私にとって書籍に囲まれた生活は「心地よい」ものであるが、「秘密めい」ているのは、さしあたり書籍があらゆる未知の世界を内包した物理的メディアであるから、と言ってよさそうである。大学で学んでいる時分は、図書館の蔵書が己を幾重にも取り囲んでいる状況に絶望―絶対に全て読みつくせない―しながらも、僅かでも自らの嗜好に叶った書籍に出会い新たな思考を得られるのではないかという志向に従い、これもまたある種の高揚感を味わいつつ様々な書籍を手にしたのである。つまり、書籍は情報の集積であるのだが、同時にあくまで「物理的」メディアであって、単なるデータの集積ではないところに（も）意味があるという感覚がある。勿論、どんな粗末な紙に印刷されていようと、デジタル化され電子書籍になっていようと、内容的には等価であることに異を唱えるつもりはない。しかし、手触りの良い紙に好みの活字（フォント）で印刷され（私はインクの盛り上がった活字或いはプレスされて少し凹んだ活字の感じが好きだ）、手に取った感触が良いように装丁された書籍で読む行為は、第一義的なものではないが、他に代えがたい身体性を帯びた（快楽的）知的経験をもたらしてくれるように思われるのだ（純理系的な人からは「反理性的」で「ただの錯覚」と言われそうだが）。単なる情報に還元されないという点も聊か「秘密めい」ている書籍の属性である。

さて、大学では学生達に何とか古典（書籍のエッセンス）の持つ潜在力を導きとして思考の力の素晴らしさを伝えようと日々心を用いているが、その方法の一つが所謂「レポート」作成である。レポートといっても、ある事象・事項を要領よくまとめるものもあるが、ここで言う「レポート」は、テーマを設定し、資料に基づきながら自らの見解を表現するもののことである。レポート作成は、書籍（に代表されるテクスト）を読解し、テーマと関連する内容を抽出しつつ自己の思考に従って論理的に再構成した上、言語として表現するという面倒な作業が必要になり、学生にとっては厄介な課題であろう。それ故、この課題の達成は（当然「コピペ」レポートを除いて）学生の能力開発に寄与することになる。ここで大きな助けになってくれるのが図書館の存在である（以下、短い本論）。換言すれば、図書館機能を十全に使いこなすコツがわかってこそ、充実したレポート作成が可能になる。そのためには、常に図書館に足を運び、実際に書架に並んだ書籍群に触れてみるのが重要であろう。よく言われることではあるが、書架と対面して書籍を手に取るのは、検索した書籍のみを他の書籍と切り離して利用するのとは性質を異にする行為である。書架群を見回すという物理的身体的行為によって想定外の情報を手に入れられるのは、図書館に身を置いてこそである。尤も、コロナ禍の最中、Web 上のリソースの豊かさと有難さも実感する昨今ではあるが。

レポート ―書きコトバの難しさをふまえて―

文学部国文学科　准教授　迫田　幸栄

図書館の方から「レポート」について何か書いて下さいと依頼され、正直戸惑った。これまで一体どのぐらいの数の「レポート」を書き、どのぐらいの数の「レポート」を指導してきただろう。そして何より、「レポート」の何について書けばいいのか迷った。わたしの専門は言語学・言語教育（学）なので、「レポート」という類いのものに使用されている「書きコトバ」について述べることにする。

人間が行う「聞く・話す」と「読む・書く」という基本的な言語活動によってうまれる所産物は「話し（会話）」と「文章」が挙げられる。前者には「話しコトバ」、後者には「書きコトバ」が使われる。

母語（第一言語）の習得は「話しコトバ」から始まり、「書きコトバ」は学校教育のような、なんらかの適切な指導なしで身につけることは困難である。

日常の話しコトバのやりとりでは、文法的に整わない文があっても、具体的な場面に支えられることにより、誤解されたり通じなかったりすることはあまりない。また、話しコトバはすぐ消えてしまうので文法上の問題もあまり起こらない。しかし、書いたり読んだりのような書きコトバの運用となると、一定のレベルの語彙力と文法に対する知識が必要となる。

書きコトバは、本来、記録や保存するためのものなのだが、結果として、あとで読み直して書き改めることができるという特徴をもっている。話しコトバも、種々の機械の発達で、記録し保存することができるようになったが、しかしながら、あとで部分修正するということは、安易にできるものではない。記録し保存するだけではなく、書き改めることができるということが、書きコトバの最大の特徴である。したがって、まとまりのある整った文章に使われる書きコトバは、結果として、人間の認識・思考を洗練化させることとなる。

それは小学校での作文指導を思い出していただければわかりやすい。下書きに種々の手を加えて、一まとまりの整った文章に完成させるのだが、その過程において、子どもたちの認識・思考を確かなものに洗練させていく。つまり、母語（第一言語）であっても継続的に一定の訓練をうけなければ、高度な書きコトバの獲得はできず、高度な認識・思考活動もできないということになる。

つまり、小学校、中学校、高校、そして大学（大学院）、それぞれの段階にあわせて、我々はその都度、自分の認識及び思考内容、つまりある種の自己暴露をしながら、文章をしたためてきた。

いまのわたしもこの文章を悩みながら書いている。書いては消すをくり返し、単語のチョイスと一文一文の構造、段落のまとまりに目配せしながら、推敲している。こういう時にいつも思い出すのは亡き恩師、鈴木重幸先生のことばである。「一旦文字化してしまえば、（その文章はあなたの意識とは無関係に）一人歩きします。」話し手と聞き手が共有するような場面と違って、（文章の）読み手は書き手に気軽にいちいち確かめることができない。もしくは物理的にすぐ確かめることができない。自分が書こう、伝えようとしている内容を正しく読み手に読み取ってもらえるように努め、読み手に理解の責任を押しつけるな、という教えであった。

大学での「レポート」とは何だろうかと改めて考えると、一般的に課題として課される「レポート」にはテーマがあり、そのテーマに関する知識や理解度を示すことになる。となると、まずそのテーマに関する客観的な事実（講義内容からさらに自ら調べた内容を加えて）を徹底的に調べる必要がある。もしそのテーマの「問い」が明らかな場合はそれに答え、具体的に示されていない場合は自ら「問い」を設定し、答える。十分な知識や理解度があれば、そのテーマに内在する問題点や疑問点が必ず見つかる。そしてその「問い」に対する「答え」は主観的な感想ではなく、客観的な根拠（ファクター・事実）と論理的な推論によって構築される必要がある。ここでも書き手の知識と理解度が問われる。いわゆる序論・本論・結論、という一般的なレポートの構成は、「問い」＝問題の提起から始まり、客観的な根拠（ファクター・事実）と論理的な推論による議論、そして最後にその「答え（解決策）」を示すという形になる。

読み手である我々教員の多くはまず以上のことを基準とし、書き手からある意味で切り離された「レポート」を評価する。

理系のレポート文系のレポート、そして数学のレポート

国際政治経済学部国際経営学科　専任講師　今井　悠人

レポートというテーマについて小文を書くにあたり、十数年前からの記憶を辿ってみたところ、理系のレポートと文系のレポートについて感じたことがあったので書いてみることにしたい。

筆者の通っていた大学では、理工学基礎実験という講義が理工学部の学生全員の必修となっていた。そこで工学系のレポートの作法を叩き込まれる。レポート用紙の大きさ (A4)、必ず表紙をつけること、表紙には課題名、出題日、提出日、学籍番号、氏名等を所定の位置に記入すること、ホチキス留めの位置、ページ番号、グラフの記入方法と閉じる向き。内容については勿論の事、これらのうち一つでも間違っていると再提出となる。さらに、提出ボックスは締め切り時刻になると自動で鍵が閉まり、その時点で提出されていないものは締め切りに間に合わなかったものとして処理される。評価については学科ごとに差があるという噂があった。実験が重要な位置を占める応用化学系は一番厳しく、数学系は最も緩いというもの。採点側になると程度の差はあるが事実であるとわかった。余談だが、応用化学系には特別な実験ノートがあり、実験計画から結果までをこのノートに記入することが求められる。生協で 1,600 円ほどしただろうか。後からの挿入や脱落を防ぐための通し番号付きの複写式で、複写部分をレポートとして提出するのだが、当該実験中に記入した部分については第三者 (この講義では実験監督者) の記名または押印が求められる。これは実験結果の改竄を防ぐためとされている。閑話休題。実験に出席するためには、プレレポートと呼ばれるものを作成しなければならない。これが曲者であった。ほとんどの実験では実験器具や試薬の性質、実験手順などをまとめる程度で良いのだが、電気系学科の鬼門として知られる項目があった。この実験項目では器具や手順に加えて、基礎理論の解説や実験の内容を理解し、理論解を導出しておく必要がある。しかしそれだけで安心してはいけない。出席確認の際に突如始まる質疑応答に答えられなかった学生は退席させられ、翌週の再実験に回される。なお、理由の如何に関わらず 3 回実験に出席できないと単位を落とす。実験自体は難しくないのだが、ポストレポートが厄介で、手書き指定である上に 30 枚以上にはなったと記憶している。もちろん再提出なしで通ることは稀、1 回目の再提出で通れば優秀である。過去レポートが使えると思う向きもあるだろうが、そう簡単にはいかない。採点者の手元には過去の優秀なレポートがコピーされてあり、剽窃でもしようものなら一発で終わる。通常の講義においても、さすがに提出時刻の自動管理こそないものの理工学基礎実験に準ずる形での提出が求められることが多い。しかし形式という点では実験レポートが最も厳格であり、そこで訓練されていれば形式不備で戻されることはない。再レポートとなるのは内容に不備があるからである。

翻って文系のレポートはどうだっただろう。文系学部の講義に潜っていた身としては、それほど厳密に指示されることはなかったように思う。またレポートのテーマについても、理系の・・・を示せ、とは異なり、・・・について論ぜよ、といった形式がほとんどであった。教授は冒頭と結論しか読まないから、途中にカレーやプリンの作り方を書いて分量を増やせば良いという都市伝説もあったが、寡聞にしてその内容で提出した学生がいるかは知らない。

最後に、数学のレポートについて。数学は自由である。内容さえ良ければ、スーパーのチラシの裏であろうが、ルーズリーフの切れ端だろうがなんでも良い。実際、端をちょこっと折っただけの B5 型ルーズリーフでレポートの提出を受けたことは何度もある。名前こそ書いてあるものの、学籍番号はあれば良い方、出題日や提出日は望むべくもない。しかし、それによって減点されたりすることはないように思う。せいぜいがもう少し綺麗に書けよと心の中で舌打ちをする程度である。教員の方も我が身を省みて大きなことは言えない。体裁よりも内容を重視する文化がそこにはあった。

「レポート作成」という行為を振り返って

国際政治経済学部国際政治経済学科　専任講師　菊地　宏樹

高校までの授業の単位の認定は主にテストで判定が下されていたかと思う。しかし大学に入ると授業の評価方法の幅が広くなる。高校に引き続き、最終試験で単位を認定する方法もあるが、それに加えて発表により単位を認定される授業やレポートを提出することにより単位が認められる授業というものも出てくる。正直なところ私は大学に入って当初、レポートが苦手であった。高校にしても、大学にしても、テストで成績を判定される授業では、解くべき問題は与えられているし、その問題を解くためにどんな資料を参照すればいいのかが明確に指定されている（高校であれば教科書であるし、大学では教科書やレジュメである）。それらを勉強すれば単位が来るのであるからこちらの方が楽である。一方でレポートの場合は、解くべき問題がある程度、与えられていることも多いが、時折、自分で解くべき問題まで設定しなければいけないということもある。それに加えて、どのような文献を参照しなければいけないかもこちらで考えなければいけない。これは自由になったといえばそうなのであろうが、どちらかといえば私はこの自由を持て余しがちであった。最初の基礎ゼミ的な授業は好きなテーマで調べものをするものだったので、まず調査するテーマ・課題の設定で苦戦したし、別の選択授業では最終レポートのテーマが「何か面白いこと」であったので、途方に暮れたものである。

とはいえ、レポートを書かないことには単位が来ないので、とりあえず OPAC で検索した資料を手当たり次第に読んで、使えそうなところをまとめるという作業をしてしのいでいた。当初は、かなり無理やりにレポートを書いている状態であったが、しばらくしてだんだん面白味も感じるようになってきた。必ずしも決まった回答がない事に関して、どこからか証拠を見つけて論証をするという作業が非常に楽しいという風に感じるようになったのである。それを感じた最初のケースが、明治の偉人（確か木戸孝允だったと思う）がどのようなことを考えていたかを検証するという課題であった。図書館の奥深くに眠っていた日記を掘り出して、読み解き、それらしき記述を見つけるというような作業が宝探しをしているような感覚で非常に楽しかったのを覚えている（昔の研究雑誌や企業の資料を掘り返して、何か面白い事実がないかを宝探し感覚でやるのは現在でもよくやっている）。当時は研究者になるとは夢にも思っていなかったが、そういう作業が楽しいあたり意外と素質はあったのかもしれない。ぜひともこういった自分で自分なりの説を立証することの楽しさをぜひとも感じ取ってもらいたいものである。

こう書くと研究者になるというのであれば、レポートを書く能力（例えば何らかの事柄に対して自分なりの仮説を立てたり、それにふさわしい資料を探す能力）というのは重要になると思うが、一般企業に入るのであればあまり関係ないのではと思われるかもしれない。ただレポートで培われる力というのは別に研究者になる人にしか役に立たないのかというとそうでもないと思う。実際、入社してから何か新しいプロジェクトを始める際などにいろいろと調べ物をしてほしいと上司から頼まれることもあるだろうし、そういった場合には適切な資料を探して、意見をレポートにまとめるという作業をすることになるだろう。そう考えると、今のうちにレポートをしっかり書くという行為を身に着けておけば、大学生活で単位をとるのにとどまらず、後々にまで役に立つと思われる。自分でものを調べられるという行為は後々まで貴重な財産にもなるものであるから、ぜひとも腰を据えてレポート課題に取り組み、ものごとを自力で調べる能力を磨いてほしい。

ブックマークを使ってみよう！

一度調べた本のタイトルをうっかり忘れてしまったことはないですか。図書館のホームページにあるマイライブラリの中のブックマークに本を登録しておくと、そのうっかり忘れを防げます。ブックマークの使い方をご案内します。

①ブックマークに登録してみよう

それでは、ブックマークに登録してみましょう。

まず、マイライブラリに入りましょう。ブックマークは、マイライブラリに入った状態で登録をしないと保存ができません。その状態で、例えば「探偵小説」と検索をします。複数の検索結果が表示され、探している図書（図１）にたどり着いたら、登録のボタンを押します。すると、［とりあえず登録］と［メモなどを入力し登録］の二つのボタンがでてきます。ここでは赤枠の［とりあえず登録］をしてみましょう。「登録」ボタンから「編集」ボタンに変わり、登録できたかどうかは、上部の検索窓の並びにある［ブックマーク］をクリックすると確認できます。（図２）

②登録したブックマークを編集しよう

ブックマークに登録した本が多くなったら、リストを作成して、項目ごとに分けると便利です。その方法は下記の通りです。

ブックマークに登録した図書の編集ボタンをクリックすると、［ブックマークを編集］が現れ、［リストを選択］と［メモ］ができるようになっています（図３）。［リストを選択］の［指定なし］の枠をクリックすると、リストを選択できる画面がでてきます（図４）。選択肢に適当なリストがなければ、自分で作成します。例えば図４のオレンジ枠内に「探偵小説」と入力し、隣の［＋作成］ボタンをクリックすると、図５のようにリストの選択肢に「探偵小説」が加わります。リストをチェックして［決定］ボタンをクリックすると、図６のようになり、ブックマークに登録した図書を探偵小説のリストに編集できました。さらに［メモ］欄に必要があれば記録を残し、［編集内容を保存］をクリックすれば、［とりあえず登録］した資料がリストに登録されます。

③ブックマークを活用しよう

ブックマークの登録方法やリストへの分類の方法がお分かりいただけましたでしょうか。リストを作成して、登録した図書があるとブックマークは図７のようになります。

ブックマークへの登録は、１冊ずつだけではなく、数冊を一括して登録することもできます。また、ブックマークした図書をリストに登録する際、複数のリストに登録することができます。ブックマークした図書はブックマークから削除したり、リストから削除したりすることができます。必要に応じて自由に加減ができます。（ただし、作成したリストの項目は削除できません。ご注意ください。）削除する際も一括で削除ができます。

実際にブックマークを使って、自分だけの蔵書リストを作成し、役立ててください。

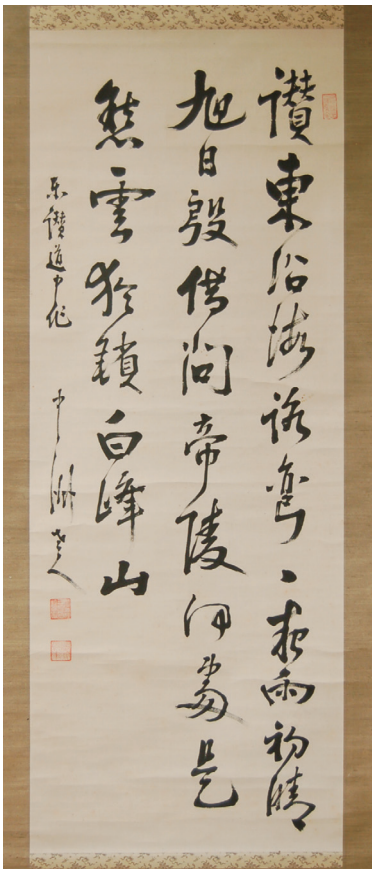
本学所蔵資料紹介

三島中洲書幅

明治二十六年

三島中洲…本学創立者。明治二十九年 東宮侍講、明治四十五年 新帝（大正天皇）の侍講となる。大正四年に宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。

明治二十六年七月、中洲は、廣と復の二子を連れて備中（岡山県倉敷市・高梁市）に帰り、先祖及び山田方谷の墓に参拝。兄弟、親戚を訪れ、讃岐に遊ぶ。



讃東沿海路彎彎
夜雨初晴旭日殷
借問帝陵何處是
愁雲猶鎖白峯山

讃東の沿海路彎彎
夜雨初めて晴れて旭日殷し
借問す　帝陵何れの処か是れなる
愁雲猶ほ鎖す白峯山

讃岐の東部の地は海に沿って、道路がくねくねと曲がっている。昨夜からの雨もあがって朝日が赤く輝いている。近くに崇徳陵があるとのことであるが、どこにあるかちょっとお尋ねしたい。うれわしげな雲が、陵があると聞く白峯山のあたりを閉ざしている。

（石川忠久編『三島中洲詩全釈』第二巻より）

作家のおやつ巡り①

４月初旬、三島由紀夫や松本清張、そして吉川英治などの作家が愛したといわれている豆大福を目当てに、和菓子の名店・群林堂を訪れた。店舗は、出版大手の講談社に程近い東京都文京区音羽にある。数年前、昼過ぎに訪問した際は、既に売り切れていたため、リベンジの今回は９時過ぎに到着した。店前には既に５組ほどの列ができていたが、ほどなく入店でき、豆大福とみたらし団子を購入。豆大福は、大きめの豆に餡もぎっしり詰まっていて美味であった。皆さんも護国寺への参拝ついでに寄ってみてはいかがですか。

本学教職員著書紹介

『レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学
－旧蔵漢籍の目録と研究－』

町　泉寿郎 編
（汲古書院、2021 年 3 月 25 日発行）
A5 判　413 頁・10,000 円＋税
ISBN：9784762966774

東アジア学術総合研究所日本漢学研究センターが主体となって、2015 ～ 2019 年度に日本学術振興会の助成を受けて私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（略称 SRF）「近代日本の「知」の形成と漢学」プロジェクトを遂行した。本書は、そのプロジェクト期間中の資料調査とシンポジウムの成果をまとめたものである。論文を学外からウィリー・ヴァンドゥワラ・井川義次、本学から牧角悦子・田中正樹・清水信子と筆者が執筆し、目録（和文と仏文）を清水信子・ヴィグル・マティアスが編纂している（敬称略）。

レオン・ド・ロニー（Léon-Louis-Lucien Prunol de Rosny、1837 ～ 1914）は、その人物と語学力に瑕疵があり、黎明期の学者特有の間口の広さが仇となって、今日必ずしもその評価は高くないが、間違いなくフランス日本学の開祖というべき人物である。筆者は本学 21 世紀 COE プログラム（2004 ～ 2008 年度「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」）の際に、ド・ロニー旧蔵書のことを知り、いつかその調査を実施したいと考えていた。

ド・ロニー旧蔵和書は、ピーター・コーニツキー教授編纂の目録が知られており、我々が近年調査を行ったのはその旧蔵漢籍である。ド・ロニーは若くしてパリの東洋語学校で、フランスシノロジーの泰斗スタニス・ジュリアンとアントワヌ・バサンに中国語を学び、ジュリアンの勧めに従い未開拓の日本学に独学で着手した。ジュリアン歿後その所蔵漢籍はド・ロニーに遺贈されたため、その旧蔵書としてリール市立図書館に伝存する。ド・ロニー旧蔵書はシーボルト資料等と並んで、19 世紀欧州東洋学とその中から萌芽した日本学の歩みを考えるうえで重要なコレクションである。

我々は中国研究・日本研究の分野において古典学の長い蓄積を持つが、その一方で異文化圏の近代の学者が開拓した地域研究としての東洋学がある。これからの中国研究・日本研究の刷新のために黎明期の学者の足跡が指針になるのではないか。筆者がド・ロニー旧蔵書に関心を寄せる理由である。

文学部中国文学科　教授　町　泉寿郎

編集後記

「季報」110 号をお届けします。

今号では、「レポート」に関する内容で 4 名の先生にご執筆いただきました。レポート作成前に読んでみてはいかがでしょうか。「ブックマークを使ってみよう！」の記事もレポート作成の一助になると思います。また図書館入口でもレポートに関連する展示が行なわれています。こちらもご覧ください。

（S・A）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第 110 号

発行日　2021 年 7 月 1 日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒 102-8336　東京都千代田区三番町 6-16
電話：03-3263-6364
柏図書館　〒 277-8585　千葉県柏市大井 2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ